岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（30）

久米三成4号墳

1979.3

岡山県教育委員会

文化課

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（30）

久米三成4号墳

1979.3

岡山県教育委員会

文化課

序

古代吉備国の中心である岡山県は、全国的にも遺跡数の多いことで知られ、中でも古墳はその規模、数においても他に引けを取らない地域であります。最近の開発事業に伴い、文化財保護上各種の問題が生じていますが、県教育委員会では保護・保存につきまして、慎重に対処しております。

このたび昭和53年度国庫補助事業として発掘調査を実施いたしました久米三成４号墳は、墓地造成工事に伴って昭和52年７月に発見された全長35ｍの前方後方墳であります。前方後方墳は、全国的に他の種類の古墳に比べて数が少なく、また吉備の特色をもつ古墳と言われ、県下で28例目、美作地方で８例目の発見であります。

その保存につきましては、文化庁をはじめ久米町教育委員会、県内研究者の方方の援助を受けつつ協議をすすめてきました。とくに、調査後におきましては所有者である密厳寺とその壇家の方々の格別の御理解のもとに協議がすすめられました。

その結果、昭和53年10月27日、本古墳の史跡指定について国の文化財保護審議会が文部大臣に答申し、保存の途が示されることとなりました。ここに、関係各位に感謝の意を表しますと共に、本報告書が、今後の保護・保存のために活用されれば幸いに存じます。

昭和54年３月

岡山県教育委員会

教育長　佐　藤　章　一

例　　言

1．この報告は、墓地造成工事に伴い発見され、昭和53年度国庫補助により岡山県教育委員会が実施した久米三成４号墳の発掘調査の概要である。

2．調査期間は、1978年５月15日～６月30日である。

3．この報告書の作成は岡山県教育委員会が実施し、執筆は、第１章第１・２節、及び第６章を文化課職員河本　清が、第１章第３節～第５章を同柳瀬昭彦が担当した。

4．報告書にかかる出土遺物の整理・実測は、山本悦世、光永真一の協力を得、実測図・遺構図の浄写及び全体編集は柳瀬があたった。また、遺物写真は文化課職員岡田　博の援助を得た。

5．この報告書の高度値は海抜高である。また、方位は磁北である。

6．この報告書に掲載した「三成古墳周辺古墳分布図」は、『岡山県遺跡地図』の浄写である。

目　　次

第１章　経過 …… 1
　第１節　位置 …… 1
　第２節　調査に至る経過 …… 3
　第３節　調査経過 …… 3
第２章　墳丘調査 …… 5
　第１節　葺石 …… 5
　第２節　盛土と旧地表 …… 5
　第３節　墳域と規模 …… 10
第３章　埋葬施設 …… 11
　第１節　後方部第１主体 …… 11
　第２節　前方部第２主体 …… 14
　第３節　墳丘及び墳丘外の主体 …… 14
第４章　その他の施設 …… 16
第５章　遺物 …… 17
　第１節　第１主体の出土遺物 …… 17
　第２節　くびれ部の出土遺物 …… 19
第６章　まとめ …… 20

図　目　次

第１図　三成４号墳周辺古墳分布図（S＝１／30,000）…… 1
第２図　三成４号墳地形図（S＝１／300）…… 6
第３図　三成４号墳遺構配置平面図及び墳丘断面図（S＝１／300）…… 7
第４図　三成４号墳墳丘南側葺石平・側面図（S＝１／40）…… 8
第５図　三成４号墳墳丘北側葺石平・側面図（S＝１／40）…… 8
第６図　三成４号墳トレンチ断面図（S１／４）…… 9
第７図　三成４号墳第１主体部平・断面図（S＝１／30）…… 12
第８図　三成４号墳第２主体部平・断面図（S＝１／30）…… 13
第９図　三成４号墳第３主体部平・断面図（１／30）…… 15
第10図　三成４号墳第４主体部平・断面図（１／30）…… 15
第11図　三成４号墳第５主体部平・断面図（１／30）…… 15
第12図　三成古墳くびれ部遺物出土状態（１／30）…… 16

第13図　三成４号墳出土遺物（１）実大 …… 17
第14図　三成４号墳出土遺物（２）…… 18
第15図　三成４号墳出土遺物（３）…… 19

表　目　次

表１　三成４号墳計測表 …… 10
表２　美作地方前方後方墳一覧表 …… 21

図　版　目　次

図版１－１　三成４号墳くびれ部及び後方部調査前（南東から）
　　－２　三成４号墳墳丘清掃後全景（南東から）
図版２－１　三成４号墳墳丘清掃後全景（東から）
　　－２　三成４号墳調査後全景（東から）
図版３－１　三成４号墳後方部南側葺石検出状況（東から）
　　－２　三成４号墳後方部北側葺石検出状況（西から）
図版４　三成４号墳後方部墳丘南側横断面（東から）
図版５－１　三成４号墳後方部墳丘北側横断面Ⓑ（北東から）
　　－２　三成４号墳前方部墳丘東側縦断面Ⓔ（北から）
図版６－１　三成４号墳くびれ部中央葺石検出状況（東から）
　　－２　三成４号墳くびれ部整形状況（南から）
図版７　三成４号墳くびれ部墳丘整形状況及び遺物出土状況
図版８－１　三成４号墳第１主体部人骨出土状態（東から）
　　－２　三成４号墳第１主体部床石検出状況（北から）
図版９－１　三成４号墳第２主体部人骨出土状態（西から）
　　－２　三成４号墳第２主体部人骨出土状態（東から）
図版10　三成４号墳第２主体部床面検出状況
図版11－１　三成４号墳第３主体部検出状況蓋石（南東から）
　　－２　三成４号墳第３主体部検出状況蓋石除去（南東から）
図版12　三成４号墳第４主体部検出状況（北西から）
図版13　三成４号墳第５主体部検出状況（南東から）
図版14　三成４号墳出土遺物（１）
図版15　三成４号墳出土遺物（２）

第1章　経　　過

第1節　位　　置

久米三成4号墳は、久米郡久米町中北下字三成に所在する。久米町は、県北の中心都市である津山市と町域を接し、その西方に位置している。地形的には津山盆地の西端にあたる。本墳は、国鉄姫新線美作千代駅の西北約1.2kmの丘陵上にある。また、近年開通した中国縦貫自動車道では、久米バスストップの北方にあり、ここからは徒歩で三成集落をぬけて10数分の距離にある。古墳の所在する地域は、吉井川の支流である久米川の中流域にあたり、ここでは、東方に流路をもつ久米川に、西北部に源を発す小河川、宮部川が合流して、小規模ではあるが、本流域最大の沖積平野を形成しているのである。ところで、本町内の古墳を概観すれば、現在、町内には約280基の古墳が確認されている。勿論、大部分は小円墳からなる後期古墳であることはいうまでもない。しかし、その分布を前方後円墳（前方後方墳）に視点をおいてみれば、2地域に大別される。1つは南部を流れる倭文川流域に形成された奥の前1号墳を初めとするものであり、他方は、久米川流域に築造された、岡5号墳を初めとする古墳である。久米町油木北の丘陵高所に所在する奥の前1号墳（油木高塚）は全長70mの前方後円墳で町内では最大規模を誇るものである。径10cmの彷製内行花文鏡1の他柳葉形銅鏃、短甲、玉類等の出土が知られていて、4世紀代の築造になるものである。丸尾瓢山古墳は久米町桑上に所在する全長30mの前方

1	三成古墳		
2～4	三成古墳群	21～29	農業試験場古墳群
5・6	鴻の池古墳群	30	長田1号墳
7～9	松埼古墳群	31	岡5号墳(岡の大塚)
10～16	芭蕉古墳群	32	寺岡1号墳
17～20	多田古墳群	33	雲山古墳

第1図 三成4号墳周辺古墳分布図(S=1/20,000)

後円墳であり、桑下に所在する瓢箪山古墳は全長35mを測る前方後円墳である。この2基の古墳は出土遺物をみないので、時期は定かでないが、いずれも前半期に属するものと推定され、倭文川流域での首長墓の系譜が推察される。一方、久米川流域においては、7基の前方後円墳(前方後方墳)が確認されている。その分布は、下流域に3基と中流域に4基である。下流域の久米川南に所在する足山1号墳全長67mの前方後円墳で古く盗掘を受け、刀、玉類が出土している。5世紀前半の築造にかかるものと推定されている。1号墳の西に所在する足山3号墳は、全長29mの全体が低平な墳形をなしている前方後円墳で、後期に属するものと推定されている。久米川南字権現に所在する狐塚古墳は全長60mで前半期の古墳と推定される。中流域の芭蕉4号墳は、全長約27mの帆立貝式古墳と推定されるものである。鴻の池2号墳は全長35mの前方後円墳で、後円部は大きく破壊され石材が露呈し、陶棺片が採集されているので、陶棺をもつ横穴式石室墳であることは確かである。岡5号墳(岡の大塚)は、丘陵先端部に近い頂部に所在する全長57mの前方後円墳で、墳頂部は大きく破壊されているが出土遺物については定かでない。前半期に比定される古墳である。

一方、群在する多数の古墳の中で、方墳は約16基程知られている。中でも20m以上の規模をもつものは3基のみである。久米町宮尾に所在する大日1号墳は、1辺28mの方墳であり、この東に所在している諏訪1号墳も1辺22mを測るものである。これらの古墳は、方墳を盟主とする所在のあり方を示している。他方、雲山古墳は1辺16mの方墳であるが、系列をなさないで単独に立地する古墳である。

このように久米三成4号墳は、町内では唯一の前方後方墳の墳形をもって、久米川流域の沖積平野を俯瞰する丘陵頂部に立地しているのである。

参 考 文 献

岡山県教育委員会「岡山県遺跡地図」　(第四分冊)　1976年

久米町教育委員会「久米町の文化財」　1973年

津山市　「津山市史」第一巻　1972年

久米三成4号墳遠景(東から)　航空写真

第2節　調査に至る経過

本墳の発見の契機は、昭和52年7月30日土地所有者である真言宗寺城山密厳寺が、墓地造成のため裏山の一部に重機を入れ工事を始め、朱を塗られた人骨の残存する箱式石棺二基を発見したものである。驚いた土地所有者は、直ちに町教育委員会へこの旨報告した。通報を受けた町教育委員会は、当時久米開発埋蔵文化財調査委員会に派遣されていた岡山県教育委員会職員橋本惣司を現地に出向させ、同時に県教育委員会に連絡した。

これを受けて、昭和52年8月2日県教委から河本清が現地に赴き実見したところ、尾根線を利用した小型の、しかも墳形の整った前方後方墳であるとの認識をもった。周知されていなかったとはいえ、県下でこうした状況下での前方後方墳の破壊例は、近年にないことであり、今後の保存措置について久米町教育委員会をまじえて土地所有者ともども協議をすすめた。しかし、一部の土地についてはすでに分譲の約束ができていたので、現状保存の見透しはなかなかむずかしいとの感触を得つつも、結論を保留した。

こうした経過をふまえて、昭和52年8月4日～8日まで河本清、葛原克人が現地に赴き、葛原が第1主体を、河本が第2主体をそれぞれ受けもち実測を行ったのち、岡山理科大学川中健二氏の指導を得て人骨を取り上げ、石棺に蓋石をのせシートをかけて埋めもどした。そして、なお詳細な発掘調査は他日を期すことにした。

第3節　調査経過

第2節の経過をたどり、本調査は国庫補助事業として、昭和53年5月15日から6月30日まで岡山県教育委員会が実施し、文化課柳瀬昭彦が担当した。

発掘調査にあたっては下記の各位に専門委員を委嘱し、調査ならびに保存について指導・助言をいただいた。

久米三成4号墳発掘調査専門委員

水内昌康　（岡山女子高等看護学院教頭）
鎌木義昌　（岡山理科大学教授）
近藤義郎　（岡山大学教授）
間壁忠彦　（倉敷考古館館長）

発掘調査の方法及び経過

本古墳は墓地造成中に発見された後、丸一年を経て本調査の実施となったものである。

調査開始の時点では、現状保存の方向も残されていたため、古墳の規模・性格・時期の把握・確認を最大の目的とし、極力現状変更は避けて実施した。

調査前の状況は、大型ブルドーザーが墳丘上を走り、雑木の根のついたままの表土が裏返しになって重なっていたため、墳丘及びその周辺部をもとのままの状態に整備・復原するまでの作業に、多くの時間を費やした。整備・復原ののち、まず後方部第１主体部と前方部第２主体部の位置・主軸方向及び地形を基に中軸線（第３図Ａ―Ａ'）を割り出し、設定した。また、第１主体部の中央と中軸線が直交するようにＢ―Ｂ'を設定し、Ａ―Ａ'、Ｂ―Ｂ'を基準として５ｍ桝のグリッドを組んだ。

調査はまず、古墳の縦横断面の盛土と地山の関係を確認するためグリッドの中軸に添った幅40～50cmのトレンチ掘り下げから始めた。次に、墳形及び墳域の確認のため墳丘の周囲に約20本のトレンチを入れ、併行して緊急調査時に一部で確認されていた葺石の範囲、保存度等を調べるために表土を除去した。一方、古墳発見時に確認され、調査が成されていた第１～４主体部については、それぞれに縦横の細いトレンチを入れ、補足実測を行い、また、新たな主体部の存在の確認のため周辺を精査した。墳形の決定に重要な位置を占めると思われたくびれ部については、一部面的に掘り広げる方法を採った。

以上の方法で調査を進め、その結果は第２～４章で詳述するとおりである。

日誌抄

昭和53年

５月15日(月)　午前中器材搬入。午後２時から発掘開始（墳丘整備作業～16日）。

18日(木)　午前中霧雨ながら整備作業。午後、文化課から平井・岡本両名の応援を受け、雨の中水準点移動作業。古墳及び周辺部地形測量（～19日）。

20日(土)　遺構検出作業～22日(月)。11時から久米町公民館にて専門委員会（出席委員鎌木義昌、近藤義郎、間壁忠彦）。13時～14時、現地視察。

23日(火)　地形測量。全体写真撮影（トレンチ設定前）。

24日(水)　主軸決定後割りつけ。後方部葺石検出作業。トレンチ設定掘り下げ（～25日）。

26日(金)　第１～３主体部補足実測。くびれ部補足測量（～27日）。

29日(月)　第１主体部床面精査（～30日）及び写真撮影。くびれ部葺石検出作業（～31日）。

６月１日(木)　後方部葺石清掃作業。くびれ部土器検出作業（～２日）。 第１主体部補足トレンチ設定（実測～２日）。

５日(月)　くびれ部～前方部北側掘り下げ、後方部葺石割り付け、実測（～９日）。

８日(木)　後方部南西側墳丘裾に第５主体部検出。

10日(土)　各トレンチ断面清掃、写真撮影。文化庁阿部技官視察。助言により数ヵ所に補足トレンチ設定。

12日(月)　補足トレンチ掘り下げ。くびれ部検出土器実測。葺石補足実測（～16日）。

19日(月)　雨の中文化課職員見学。

20日(火)　各トレンチ断面実測及び第２主体部補足実測、平板測量（～24日）。

26日(月)　葺石側面図及び断面実測。

27日(火)　墳丘清掃、全体写真、トレンチ一部埋めもどし。

28日(水)　葺石補足実測及び第5主体部補足実測、写真。トレンチ埋めもどし作業。

29日(木)　午前中主体部及び葺石埋めもどし、午後久米町公民館へ器材搬出。発掘調査終了。

30日(金)　器材を岡山へ搬出。

なお、発掘調査には久米町教育委員会、地権者である密厳寺とその壇家の方々、村上幸雄氏の協力を得、また池田登、石田道弘、山本三四一、衣笠豊治、長尾茂利、安藤郁子、石原和子の方々には調査作業員として援助を受けた。記して感謝の意を表す。

第2章　墳　丘　調　査

当古墳は墓地造成にかかり発見されるまで、遺跡分布図等には記載されていなかった。調査開始の時点では、工事による削平と破壊の著しい部分とその程度は次のようであった（第2・3図参照)。削平は墳丘上部、特に後方部の第1主体の蓋石から上部推定約1m強と後方部北側の¼、及び前方部の墳丘北側約½におよんでいる。逆に、墳丘の残存良好な場所は、全体的に後方部、くびれ部、前方部ともに南半分であった。以下調査の結果を項目に従いつつ、墳丘の有り方・状況等を概略する。

第1節　葺　　石

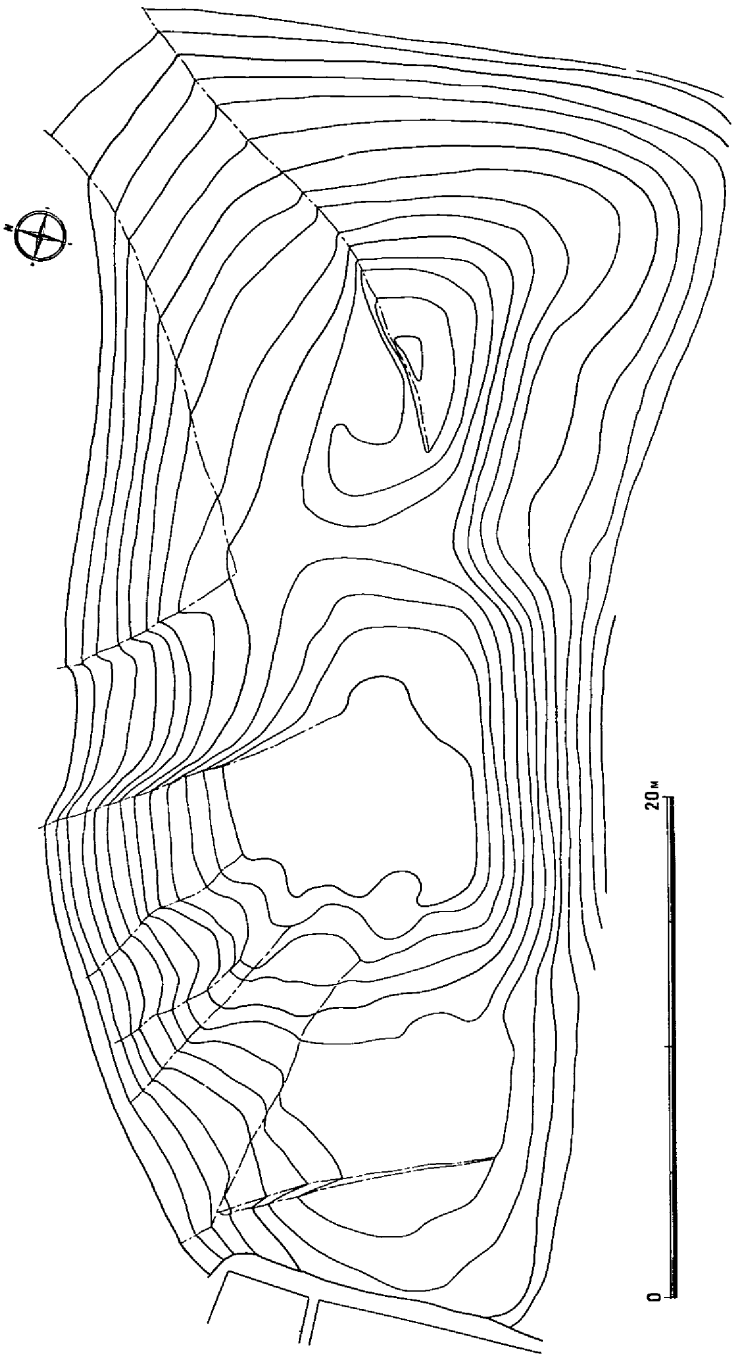
緊急発掘調査時に一部確認されており、墳丘全体にその存在も予測されたため墳丘全体の表土を除去し確認を行った。その結果、後方部にのみ存在することが判明した。その状態は、墳丘の北と南側の部分にはいくつかの根石が認められ、特に南側の葺石の残存が良好であるのに対し、西側と東のくびれ部側の葺石は規則性がなく、二次的に移動したものと考えられる。使用されている石は大きいもの（根石）で70×30cm、小さいものでこぶし大であり、石質は近隣の山に産出する安山岩系のリンバーグ石である。

北側葺石（第5図）は、根石が9個一列に存在するのみで、そのほとんどが流出、あるいは破壊されている。南側葺石（第4図）は南辺の約半分を覆う範囲に検出され、残存が最も良好な場所で根石から上に6個の礫が確認できる程度である。根石は両側ともに標高約167.0m付近に存在し、他と比べて大きな石を横口に使用している。第4図B—B'断面及び第6図Ⓑ断面によれば、旧地表を切断整形後、墳丘盛土裾に設置した状況を示している。現状での有り方から想定すれば、葺石は後方部の墳頂から約2m間の一段のみ、鉢巻状に廻らせていたものと思われる。

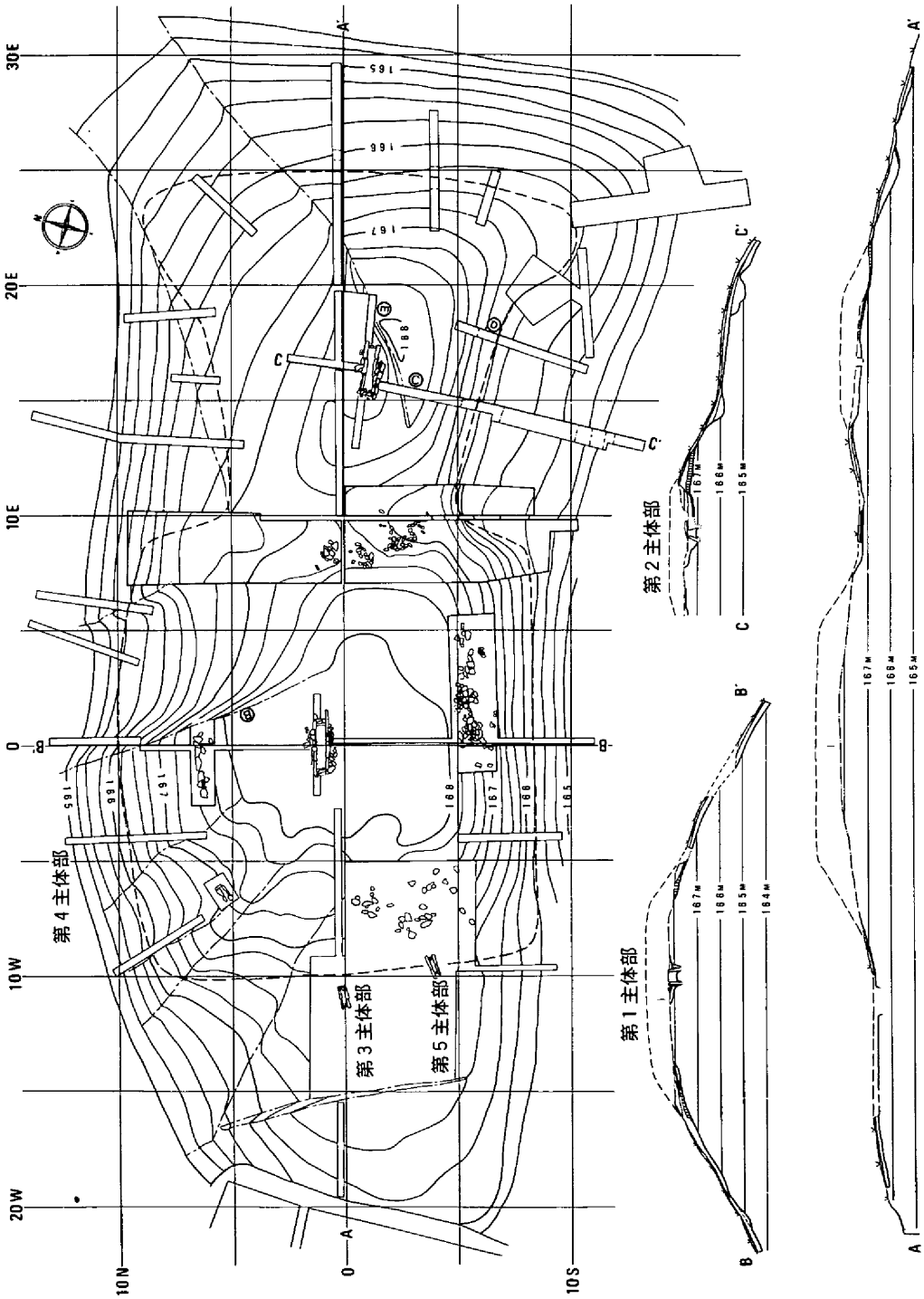
第2節　盛土と旧地表

墳丘の築成方法、規模、形態を把握するため、中軸線に沿う十字の基本トレンチに加え、約20本のトレンチを設定し掘り下げた。その結果、墳丘の残存が良好な地点では、いずれも旧地表と地山、及び盛土の関係を明確にすることができた。その中で、より明確に状況の把握できるⒷ～Ⓔの断面図（第６図）によって説明を加えたい。

Ⓑはブルドーザーで削平を受けた後方部の北東隅の断面である。Ⓑの付近では盛土がほとんど削平されているため、盛土自体の築成方法については理解しがたいが、旧地表(9)と葺石、及び盛土の状態が良くわかる。一つに、旧地表が現状では後方部ほぼ中央まで多少の凹凸をもって伸び、旧地表面（特に墳丘中央部）が人為的に削平を受けた状態は示さない。また、根石の位置で旧地表が切断されており、２が盛土の流土堆積であるので、それから裾は地山がむき出しになっていたと理解される。後方部の南側（第３・４図Ａ—Ａ'断面）においてもⒷと同様の状況を示すと思われ、これらのことは古墳の位置設定、及び墳丘規模の決定が、旧地表を切断する行為に始ま



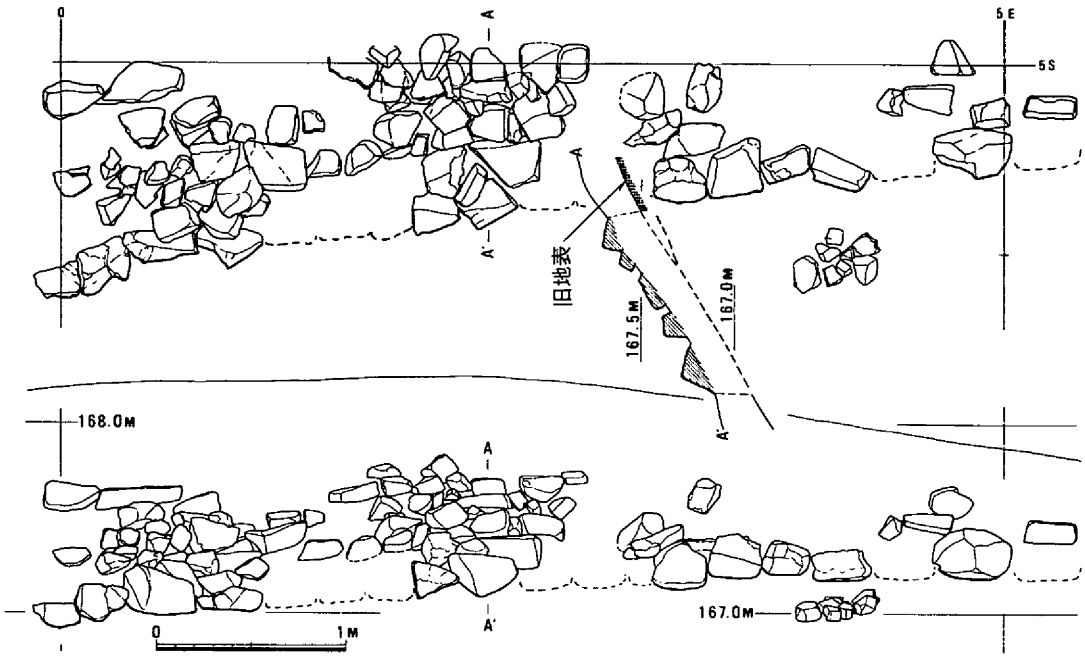
第２図 三成４号墳地形図（S＝1/300）



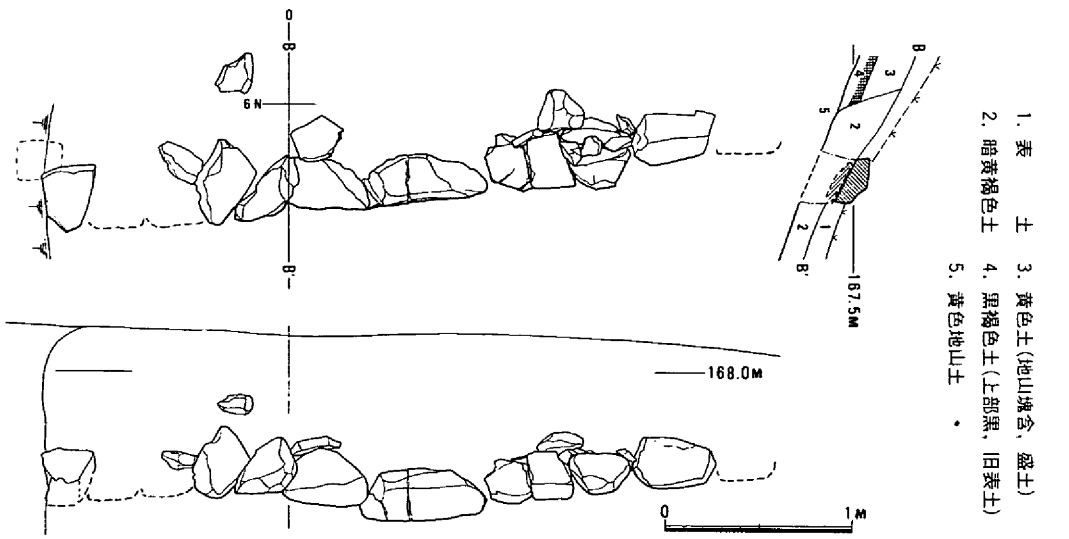
第3図 三成4号墳遺構配置平面図及び墳丘断面図(S=1/300)

ったことを示唆する。

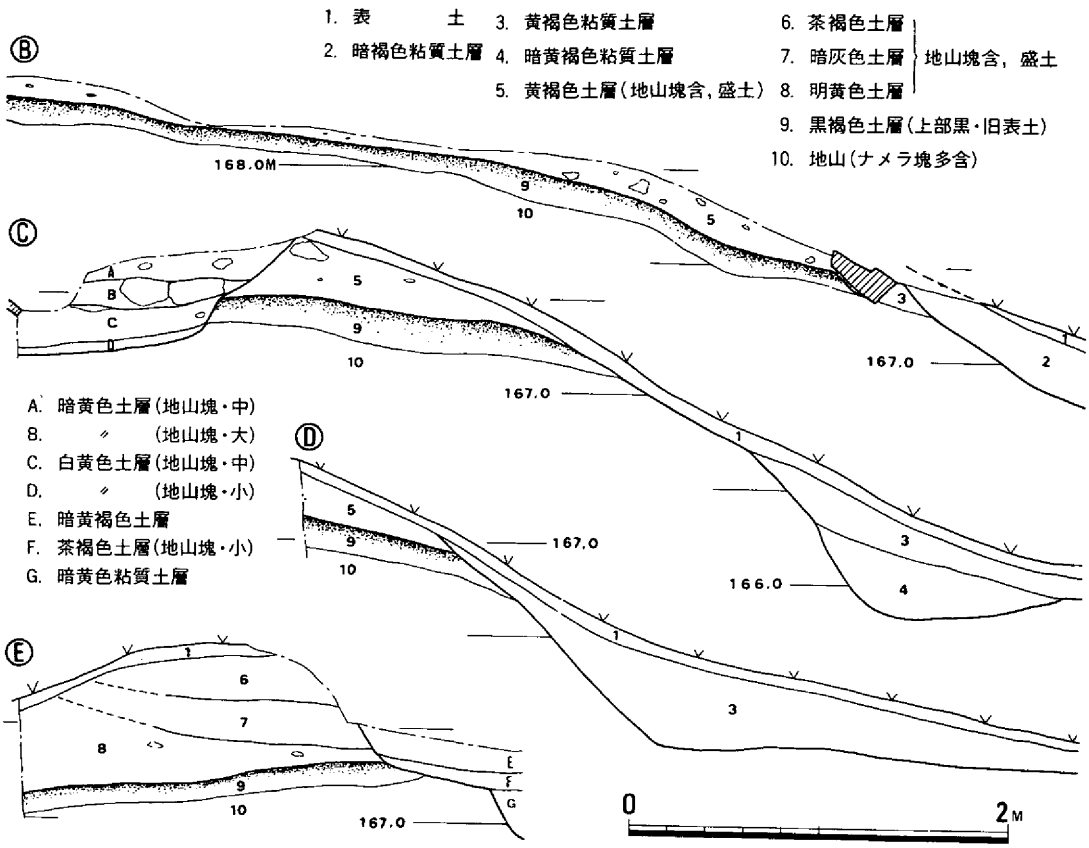
次に©・Ⓓ断面は前方部南側の断面であるが、ともに旧地表土と地山を切断・整形して墳端部を構築している状況が明瞭である。旧地表と墳端との高差は約1.0～1.4mあり、後方部南東隅と前方部南



第4図 三成4号墳墳丘南側葺石平・側面図(S=1/40)



第5図 三成4号墳墳丘北側葺石平・側面図(S=1/40)



第6図 三成4号墳トレンチ断面図(S=1/4)

東隅が同一自然地形でつながっていたとすれば、前方部からくびれ部にかけての南側の整形がかなりの規模で行われたことが推察される。また©は、項を改めて詳述するが、旧地表と盛土、及び第2主体部掘り方の関係が把握される。

Ⓔ（図版5－2）は、前方部第2主体の東側主軸延長部分の断面であり、残存が比較的良好であるため、旧地表と盛土、及び盛土の築成方法等が良くわかる。盛土は、一部断面に根ぐされによる攪乱がみられるが、第6～8層の3層に大別され、旧地表は徐々に東へ下る地形を示すが、特にそれと接する最初の盛土（第8層）は外へ向かって厚く積まれている。また6層、8層中には地山の黄色ナメラ塊が比較的多く含まれている。位置的にこの部分の盛土には、前方部南側の削平・整形部分の残土が使用されたと思われる。

なお、旧表土の9層は約20cm前後の厚さをもち、上部は黒色を呈し、下部にいくほど褐色から黄色にかわる。9層の表面が黒色を呈すのは、古墳の位置決定時において旧地表上の立木（雑草）を焼く等の行為が成された結果であろう。

第３節　墳域と規模

後方部の南側及び北側については、第３図Ｂ―Ｂ'において、葺石の根石部分で旧地表が切断されていることは前にも述べた。墳丘裾部においては、現地形との間に明瞭な傾斜の変化が認められないため、墳端を適確に把握することは困難であった。しかし、前方部東側の墳端部では、Ａ―Ａ'断面東端近くにおいて幅約1.5ｍの周溝が検出され、その南側に設定した二つのトレンチ（25Ｅ―４Ｓと24Ｅ―６Ｓの位置）においても周溝を確認した。この周溝は、前方部の南東隅の裾を廻ることなく直線的に消滅する。また第２節でふれたように、前方部南側裾はⒸ断面の位置では浅い周溝をもち、Ⓓ断面の位置では段状を呈すが、21Ｅ―９Ｓの位置で開きぎみに消滅する。

一方、本墳の北側については、その⅔程度が削平を受けていること、地形自体の整形が前方部南側ほど明瞭でないことの二つの理由により、墳端を明確に捕えることができなかった。後方部の西側は、いくらか削平を受けているものの、テラス状の平坦面を呈し、後方部で確認した旧地表の高さから推定して、その差約１～1.5ｍ間の厚さにわたって切断・整形が行われたと思われる。位置的にこの整形に伴う残土は、おもに後方部の盛土に利用されたであろう。また、くびれ部はＡ―Ａ'断面でもわかるように後方部及び前方部の推定高と比較して異常に低い。これは、地形的な状況から判断すれば、頭初は後方部のみが構築され、その段階で舌状尾根部の、くびれ部にあたる位置を尾根に直交して切断・整形した結果によるかもしれない。その場合には、前方部は第２主体部構築時に付け加えられたことになる。

なお、前方部南側の平坦面から自然地形にかかる肩部に幅約１ｍの溝が確認されている（Ｃ―Ｃ'断面）が、この溝までが墳域を表わし、平坦面が葬送儀礼上の何らかの意味をもつかもしれない。

最後に墳丘の全般にわたる特徴点を少し掲げてみたい。

本古墳は舌状の尾根上の自然地形を利用して占地され、地山整形の残土を盛土として使用する、つまり最小限の労力により最大限の効果を上げる工法がとられている。本古墳は山側に向く北面については、自然地形と区別がつかないくらいの整形しか加えられていないのに対し、平野を望む西～南面にかけては、その整形にかなり意識的な手が加えられている。そのことは全体的には地形的な制約にもよるが前方後方墳の平面形態の全体的なバランスがくずれる結果となっている。つまり、第２図の平面地形を観察すると、本来の主軸は舌状尾根の方向のように曲線を呈すことになり、それだけ地形に左右されていることを物語っている。以上のように形状は多少いびつであるが、復原計測によって各部位の数値を下表に示す。

(単位m)

	全長	後方部				前方部			くびれ部
	A+B	A	a	D	d	B	C	c	E
	35	20	(10)	18	(8)	15	19	(5)	10

表１　三成４号墳　計測表

第3章　埋　葬　施　設

埋葬施設は、当古墳発見時において後方部及び前方部の頂部にそれぞれ１基、後方部墳丘裾に２基が確認されていた。また、本調査において同じく後方部墳丘裾に１基を確認した。当初、位置的に後方部の主体の南側にもう１つの主体部の存在を予想したが、調査の結果上記以外の主体部の確認はされなかった。

この章では、発見順に後方部を第１主体、前方部を第２主体、後方部のその他をそれぞれ第３～第４主体とし、以下その調査結果を記述する。

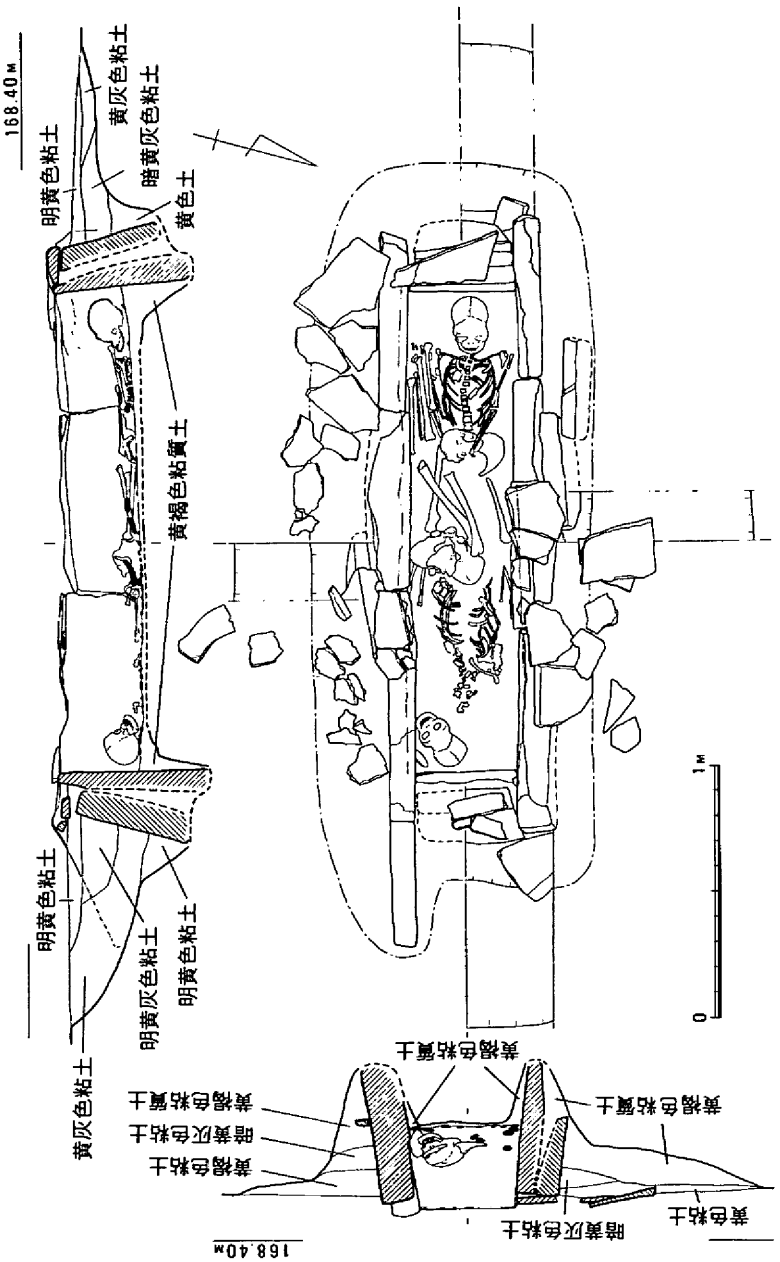
第１節　後方部第１主体

この施設は工事に伴って主体部の蓋石が移動し、中から人骨が現われることにより、本古墳発見の契機となった。通報により調査員が実見した時には、三枚あったという蓋石は全部はずされ、うち二枚は不明であり第７図の状態であった。主体の主軸は、後方部左右葺石の根石方向を基準にすれば約5°東に振り、位置は約60cm位北に寄っている。施設の種類は箱式石棺であり、側壁にはそれぞれ板石３枚、小口にそれぞれ板石１枚を使用した、いわゆる組合せ式である。

石棺掘り方は、現検出面が上部盛土を削平された地山面であり、また掘り方内の埋土が地山土と酷似しているため、平面での検出がほとんど不可能であった。石棺の主軸方向、及び石棺中央に直交する十字の細いトレンチを入れることにより、２段の掘り方を確認した。それによると、上段は現検出面で長さ3.9m、幅2.1mの、下段は長さ2.8～3.1m、幅1.1mのそれぞれ隅丸方形を呈すと思われる。両側石は、溝状の下段掘り方に埋め込んで並べ上端を水平にそろえ、側石と掘り方壁との隙間には何ヵ所かに別の小型の板石を裏込めとして添え、補強している。側石は長方形の板石の横口部を下にして横方向に使用しているのに対し、小口石は両側石に狭まれる位置に、板石の小口部を下にして縦方向に使用している。小口石は石を立てて使用するために、側石よりも床面は深く掘られ、裏側にもそれぞれ１枚の板石をもって補強し、より堅固な造りとなっている。なお、石棺の上部は旧地表面とほぼ同一レベルであるから、この事実によって、石棺の施設は盛土作業より以前に造るのではなく、盛土築成後に新たに地山面まで掘り下げて設置されたという想定に導かれる。また、石棺上面レベルで、小さいもので10×10cm、大きいもので20×30cm、厚さはいずれも２～３cmの板石が約40枚ほど、石棺周囲の小範囲に平滑に並べられた状態で検出された。これは、新しい時期の古墳には見られない風習で、蓋石によって石棺身を覆う以前の、つまり人骨納棺の時点に伴う儀場として、棺周辺をことさら丁寧に面的に整えたことの反映ではなかろうか。それはまた同時に、蓋石設置時の隙間を埋める現実的な役目も担っていたのであろう。

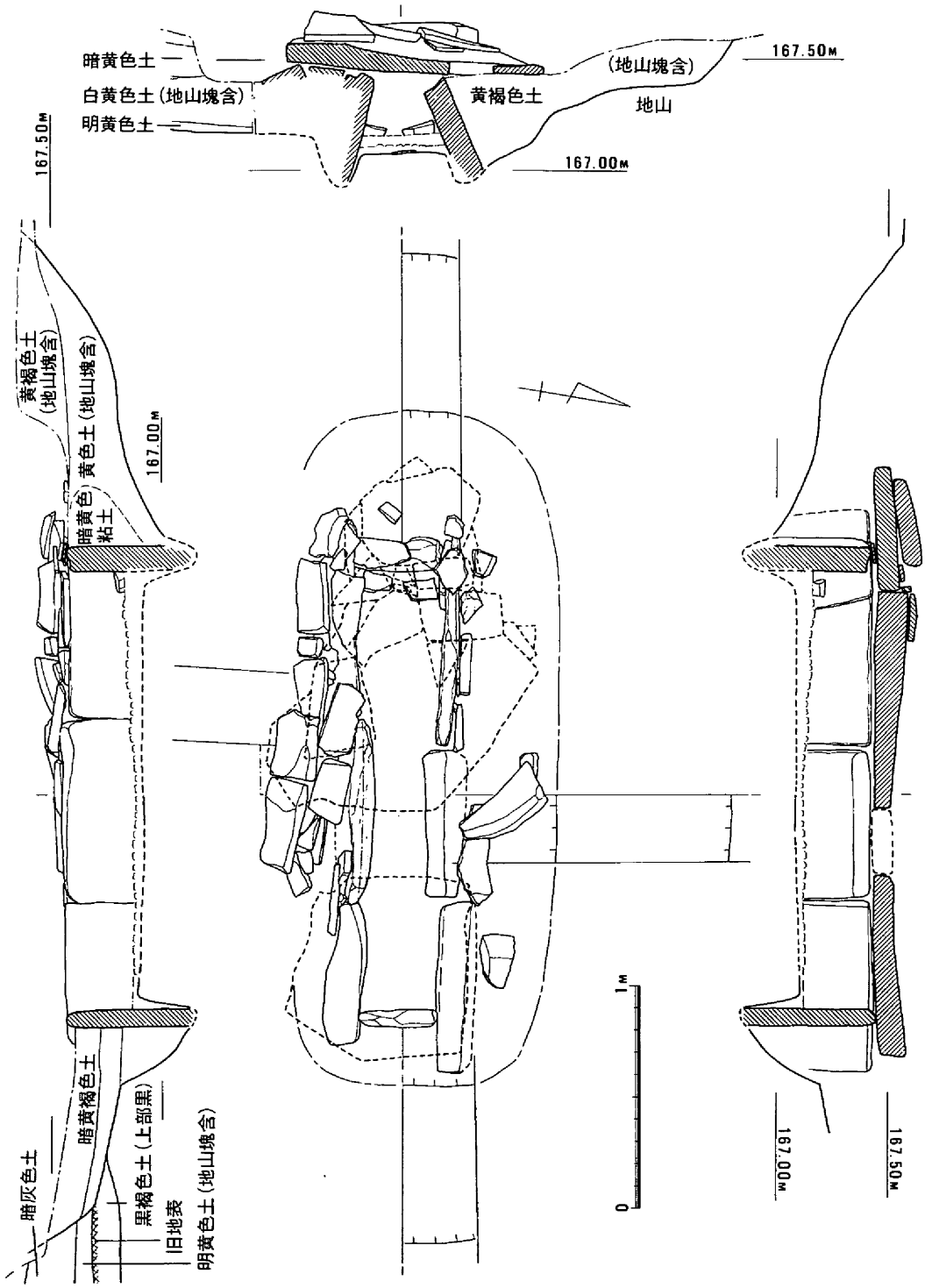
棺の床は小口石の深さの約½くらいの位置に、厚さ３cm前後の土を入れてならした後、径２～５cm

の玉石を敷いてその上に人骨、供献遺物が置かれていた。棺内の人骨は二体出土しているが、どちらも表面に朱が塗布されている。二体はそれぞれに相対する小口石に頭蓋骨を接し（西側を１号人骨、東側を２号人骨と呼称する）、大腿骨のあたりで交差して向き合う形に埋納されている。両体の重なりに視点をあてると、１号人骨の脛骨の上に２号人骨の腰骨が重なり、したがって、両体の埋納される時間差は現資料では推し量れないまでも、１号人骨が先に埋納され、のちに２号人骨が埋納されたことに疑いの余地はない。１号人骨は頭蓋骨下に枕石（２個の小角礫）をもち、全体に骨の保存が良好である。一方、２号人骨は枕石をもたず、人骨の各部分はほぼ予想される定位置に存在するが、保存はやや不良である。人骨鑑定によれば、男女一対との非公式な見解を得ているが、現在なお検討中とのことで正式の所見を入手していない。そのため断定は避けたいが、２号人骨については、人骨の出土状態からみて洗骨ののち各部分の骨を置いて埋納した可能性がある。



第７図　三成４号墳第１主体部平・断面図（S=1/30）

また、棺内の供献遺物は、鏡（仿製四獣鏡）が２号人骨の頭蓋骨南側の側石に立てかけられて出土し、鉄斧及び



第8図 三成4号墳第2主体部平・断面図(S=1/30)

鉄剣が2号人骨の胸部北側の側石に接して出土している(註1)。なお、石棺内部には天井石内側を含め、赤色顔料が塗布されている。また、石棺に使用されている石材の質は、葺石と同じリンバーグ石である。

最後になったが、石棺の規模は床面の内のりで、長さ190cm、幅45cm、深さは平均30cmである。

第2節　前方部第2主体

この箱式石棺は、第1主体と同様にブルドーザーによって上部の盛土を削平されて発見に至った。蓋石は東側の一部が移動していたが、計4枚のうち西側の2枚分は原位置を保っていた。本主体の位置は、前方部推定中央から約1m南に寄り、第1主体部の主軸より約6°東に振っている。

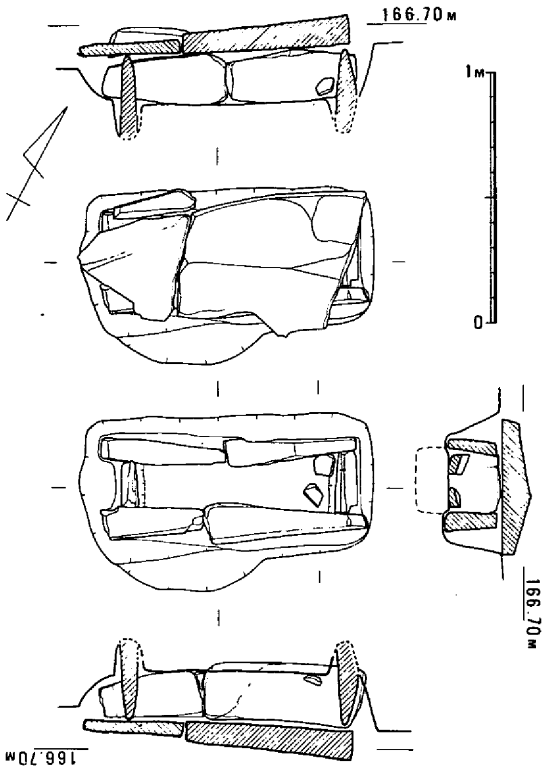
本主体は、主軸北側の墳丘断面E及び主軸中央にほぼ直交するC断面によってかろうじて土層がつながり、盛土と盛土築成後の掘り方との関係を把握することができた。掘り方は予想よりかなり広く、推定ではあるが長辺約5m、短辺3.5～4mにもなる。第2主体の工法、特徴は掘り方の状況、側石の数及び石組みの方法、床の高さ、男女一対の人骨で朱を塗布されているなどの人骨の有り方、一方にだけ枕石を有する、石棺周辺の板石の存在、石棺内部に赤色顔料が塗られているなど、第1主体のそれらに酷似している。第1主体と相違する点は、床面のレベルが約1m低い、床石は玉石ではなく側石に2枚使用されている石質と同じ種類の緑色千枚岩を5cm前後に割って敷きつめている、供献遺物がないことくらいである。ただ、人骨の保存状態が両体とも良くないが、そのことで洗骨後に埋納されたかどうかの判定は下せない。

なお、石棺の規模は床面内のりで、長さ197cm、幅40cm、深さは平均30cmである。

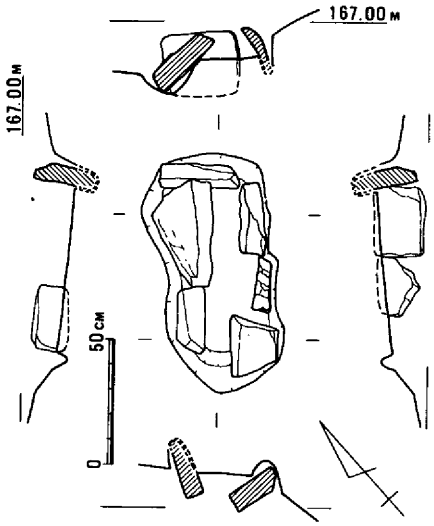
第3節　墳丘及び墳丘外の主体

検出された主体のうち、第1・第2主体のほかはいずれも後方部墳丘内(第4主体)及び墳丘外(裾)(第3、第5主体)であった。第2章第3節でふれたように、後方部の墳丘裾から西にかけての約10m間は平坦面を呈している。この部分は後方部の盛土供給後の副産物というだけの意味ではなく、第1主体部埋葬時には葬送儀礼の場として、またその後は墓域としての意味をももっていた。第3と第5主体部は、その検出位置及びレベルから考えて、古墳築造後であることは疑いの余地はない。しかし、第4主体部については、レベル的には旧地表下であるが位置的に墳丘内であり、上面を削平されていることもあってその埋納時期が当古墳築造より早いか遅いかの判断は下せない。

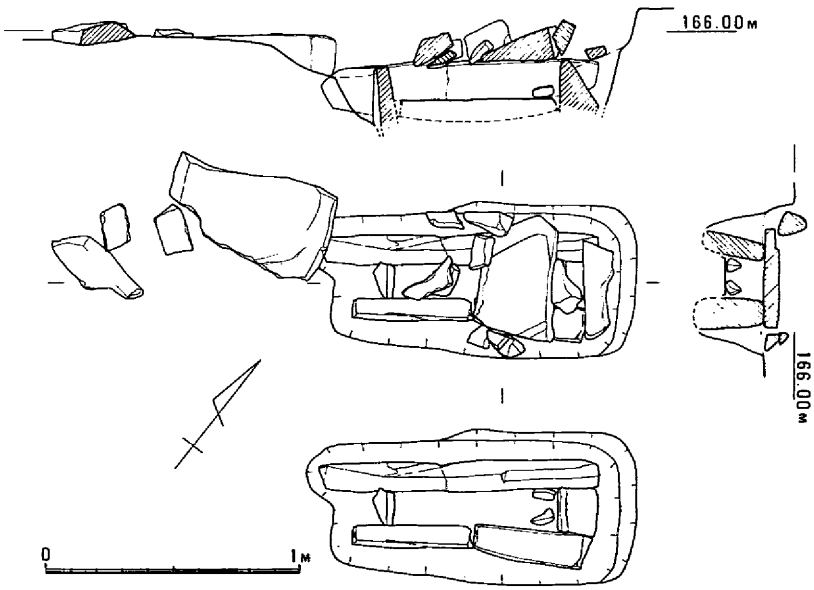
第3～5主体は、いずれも小児棺あるいは幼児棺と思われる。その中で、第3、第5主体はその規模・構造・特徴において第1，第2主体と同様の小口石の工法、枕石の存在など共通点が多い。しかし、第4主体は完存していないという事情もあるけれども、小口石の抜かれた掘り方や側石に使用されている石の大きさ、枕石の欠除等の特徴からも他の2つの小石棺と区別される。



第9図 三成4号墳第3主体部平・断面図 (1/30)



第10図 三成4号墳第4主体部平・断面図 (1/30)



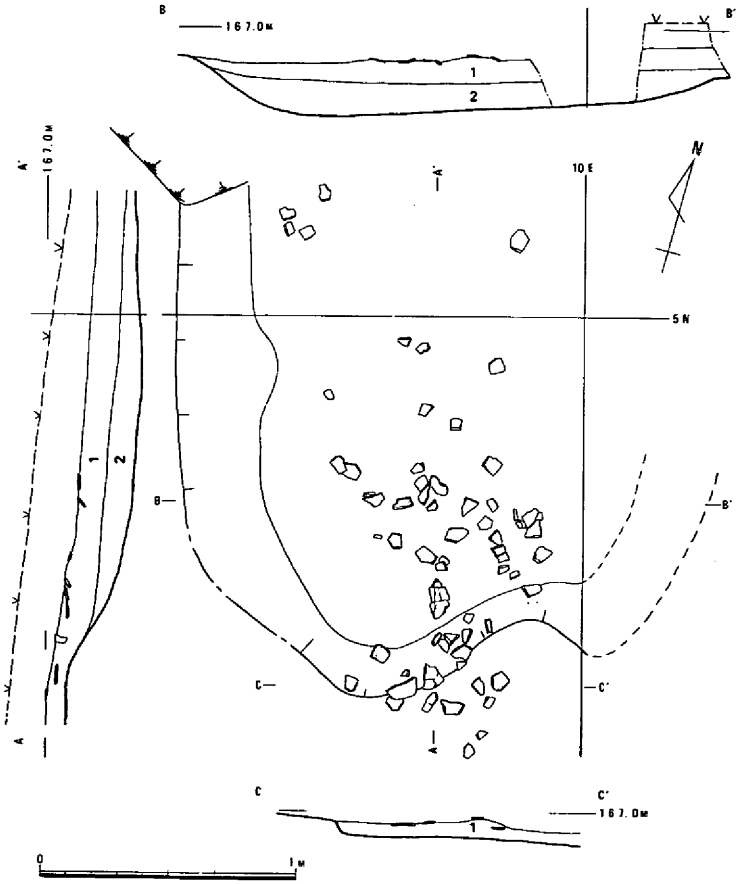
第11図 三成4号墳第5主体部平・断面図(1/30)

第４章　その他の施設

第２章において、くびれ部が異常に低いことから、当初方墳築造後、前方部を付けたした可能性を述べた。発掘調査を始めた時点では、ブルドーザーによってかなりの削平を受けていると思われたが、調査をすすめると南側から葺石が、北側から土師器片がそれぞれ検出された。くびれ部は本古墳中軸線から南に約１ｍの位置を中心として、南北から挟られたような形になっており、それぞれ葺石の一部と土師器の一群が存在する。以下、概要を記す。

土師器の一群（第12図、図版７）

第12図のように５Ｎの付近まで浅い落ち込みが至り、３～10cm四方の破片を呈す土師器が落ち込みの底から約20cm浮いた形で出土している。土師器の出土レベルが落ち込みの底から浮いていることは、落ち込みと土師器の散在の時間差があることを示す。土師器片はいずれも表裏面ともに風化が著しい。復原の結果複合口縁で底部穿孔の壺形土器と思われるが、小破片での散在の仕方や土器の性格から考えて、くびれ部での葬送儀礼の名残りとみて良いだろう。



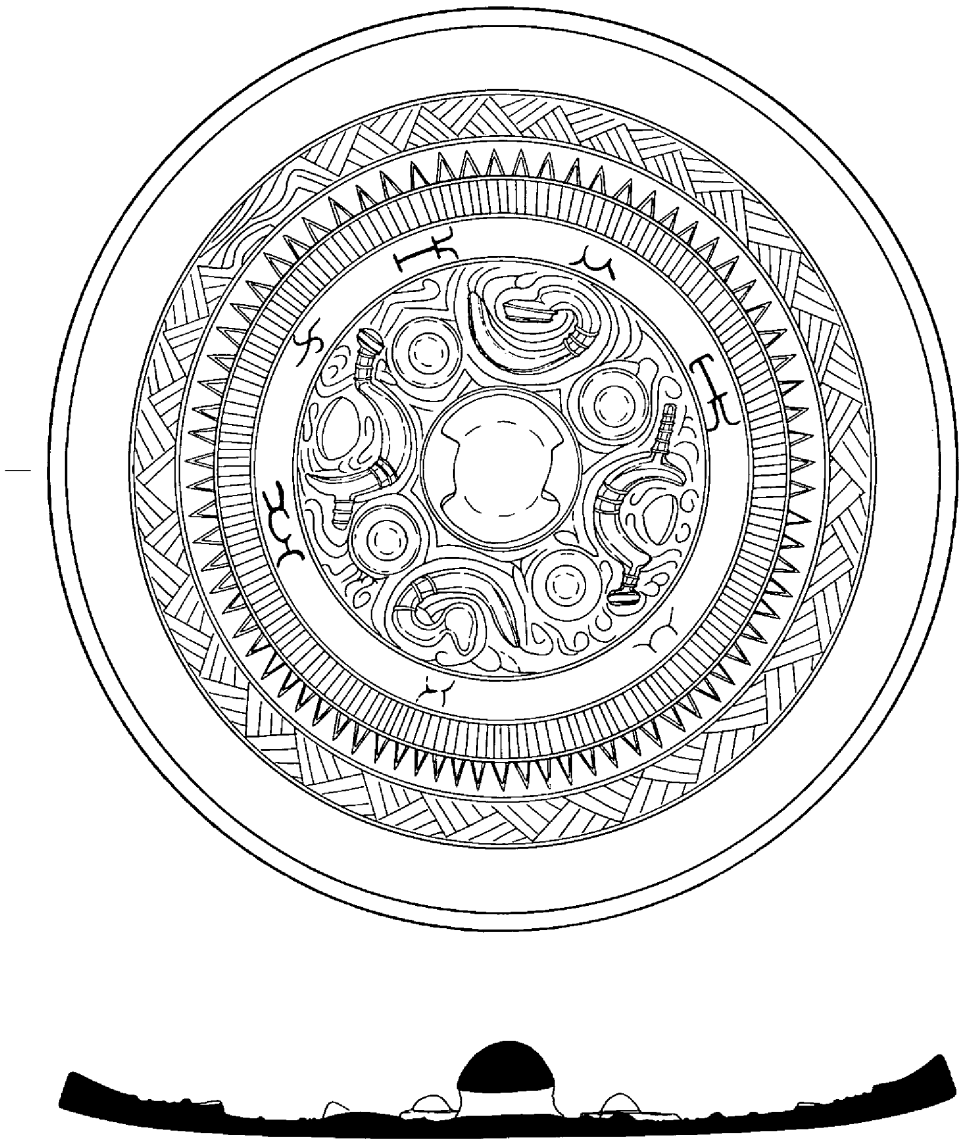
第12図　三成古墳くびれ部遺物出土状態(1/30)

手鎌の出土（図版７）

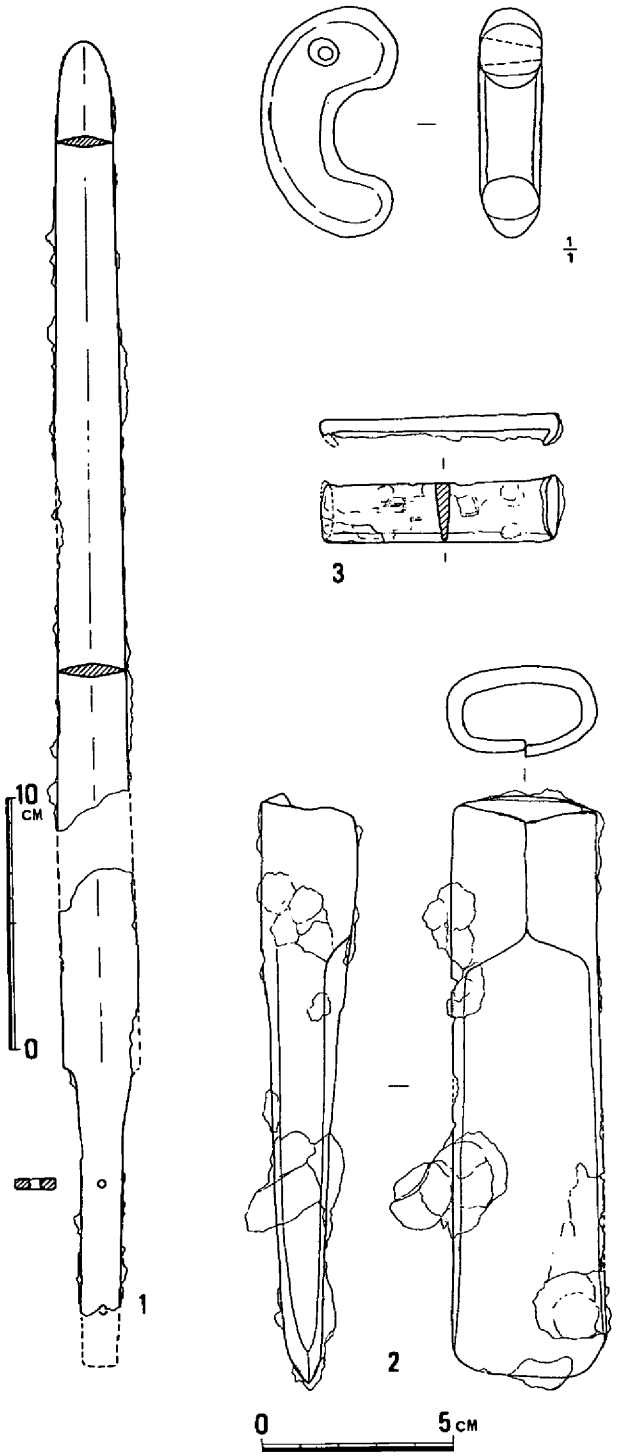
手鎌はくびれ部南側の葺石の間に検出した。付近の葺石は地山から10cm程度浮いており、後方部東側の葺石の転落と思われ、手鎌もその可能性が強い。しかしながら、葺石の間に手鎌を置くという行為は、儀礼の一つと考えて良い。

第５章　遺　　物

第１節　第１主体部の出土遺物



第13図 三成４号墳出土遺物（１）実大



第14図 三成4号墳出土遺物(2)

鏡（仿製変形四獣鏡）

鏡は1面のみ出土している。発見時に移動しているため、だいたいの出土位置及び状況の一部はわかったが、表裏のどちらが上を向いていたかどうかなどの詳細は不明である。

中央に円座鈕を有し、内区には乳を4つ配し、その間に変形した獣形二種を対称に配し、空間は唐草文でうめる。擬銘帯には7つの擬銘が見られ、うち2文字は鋳上がりが悪い。その外側には櫛歯文帯、鋸歯文帯、複合鋸歯文帯と続き、素文平縁で終わる。部分的に鋳上がりが悪く、複合鋸歯文の一部は波状にくずれている。また全体的には、獣形の変形化、銘の文様化等、比較的新しい傾向がみられる。

鉄剣 (1)

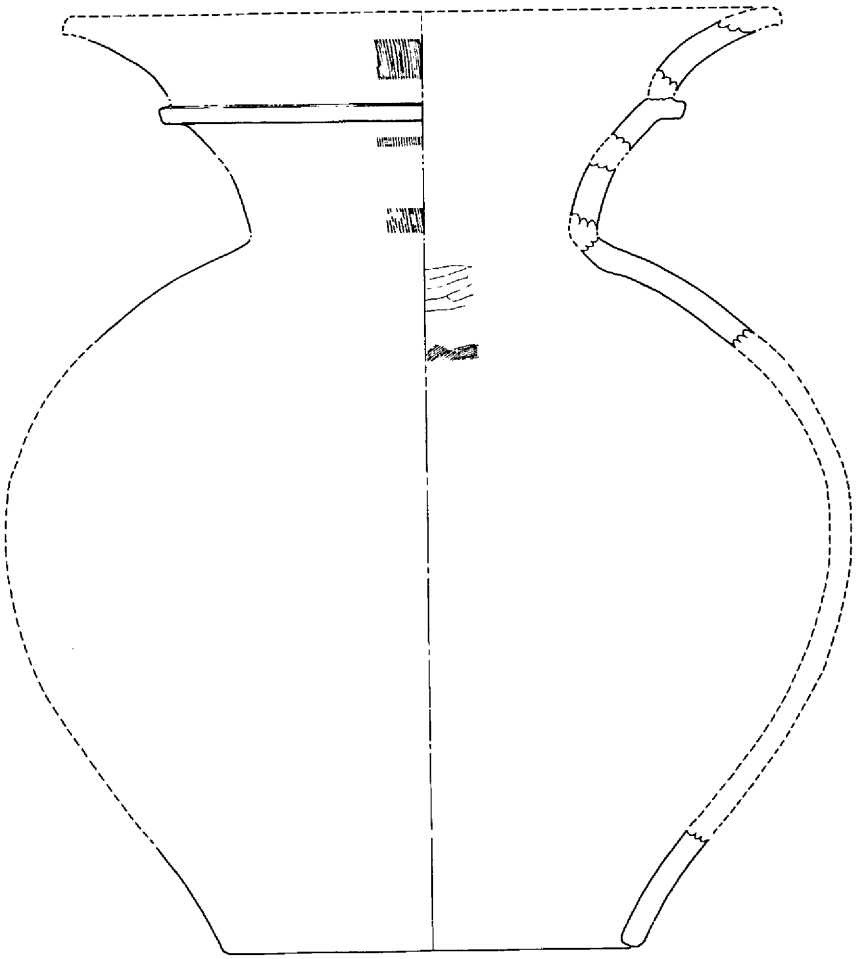
現全長50.2cmを測る。身の長さ40.5cm、最大幅3cm、厚さ5mm、茎には5cm間隔で径3.8mmの目釘穴が二つみられる。先端部方向にいくほど幅が細く、剣先はにぶいが鎬は明瞭である。

鉄斧 (2)

袋部に折り返しをもつ鍛造品である。長さ15.3cm、刃幅4cm、刃厚1cm、袋部幅3.8cm、厚さ3～4mmを測る。袋部内幅は3.1×1.5cmの楕円形を呈す。平面長方形を呈し、比較的大型の部類に入る。

勾玉

長さ3.05cm、厚さ0.85cmの瑪瑙製で



第15図 三成４号墳出土遺物（３）

ある。部分的に赤褐色を呈している。形態的にもコ字形に近く、極端に古い時期の様相は示さない。

第２節　くびれ部の出土遺物

手鎌

長さ6.3cm、幅1.5cmの長方形を呈す。両端を内側に折り曲げ袋部をつくり、板等に装着する機能を有している。この種のものとしては、多少小ぶりである。

壺形土器

この土器は、大きい破片でも5×10cmほどのもので、胴部片が多い。工事によりその大半は失われており、約20片の土器から復原した。

口縁径推定37cm、器高約50cm、胴部最大幅45cm前後のもので、複合口縁で球形の胴をもち、底部穿孔の土師器である。表面が風化で荒れているため、その調整等明瞭でないが、口縁部外面刷毛調整、内面の肩部裏はヘラケズリと刷毛目が部分的に認められる。

以上遺物について概略したが、相対的に出土遺物が少なく、特に土器に至っては、かろうじて部分のわかる断片をつなぎ合わせた程度のものである。棺内遺物についていえば、鏡は文様の退化からみて4世紀代には遡らないと思われ、また、勾玉においても同様である。ただ、壺形土器については、口縁部の形態からいえば4世紀代に遡る可能性もある。ここでは、少ない資料の中での断定だが、5世紀初葉の年代をあてておきたい。

註1　供献遺物はいずれも発見者によって一時持ち去られており、聞き取り調査による。なお、勾玉（第14図）は捨て土の中からの出土であるが、第1主体の可能性が強い。

第6章　ま　と　め

第1章、第1節でみたように、久米町内における大型古墳の系列を追ってみると、その分布のあり方は、久米川流域と倭文川流域の両水系において個別にその成立と系譜が考えられる。これらの流域は、狭長な平野であるとはいえ、それぞれが完結された水系をなすものであり、そうした平野を生産基盤として、出現したものがこれら大型古墳の被葬者として位置づけられ、政治的地域集団の首長として、首長権を確立したものと考えられる。久米川流域では岡の大塚と久米三成4号墳の築造時期が対比される。久米三成4号墳は先にみたように、立地墳形、墳丘の築造、副葬品からの時期推定は5世紀前葉に位置づけられることが明らかとなった。一方、岡の大塚は、副葬品ならびに埋葬施設が知られていないので、今一つ確定されないが、しかし、後円部径30mに対して前方部長27m、同幅17mを計測し、墳端がやや開き気味であるが、狭長な前方部を築成している点に特徴がある。久米三成4号墳にやや先行する、久米川流域における最初の首長墓として位置づけられよう。現在知られている美作地方の前方後方墳は、第2表（註1）のとおりである。表からみられる特徴は、勝田郡勝央町植月および田井にまたがる、美野地域に三基の前方後方墳が集中する他は、それぞれ点在して立地している。しかも、埋葬主体ならびに副葬品が判明している古墳から推察すれば、それぞれの地域において最初に出現する首長墓の墳形として前方後方墳の形態をとり入れているものが多い（註2）。そして規模においても、久米三成4号墳、美野高塚を除く全ては、全長50mをこえるものである。このように、久米三成4号墳は、前方後方墳の形態をとりながらも、その墳形はややいびつである上、規模においても美作地方の他の前方後方墳と比較して、小規模である上、埋葬主体も箱式石棺を複数埋葬している点に本墳の特徴がある。

註1　表の作成は「岡山県遺跡地図」から抜き出したものに修正を加えた。

註2　近藤義郎「政治的統一体形成の条件」・『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会　1960．このことはすでに第12図で明示されている。

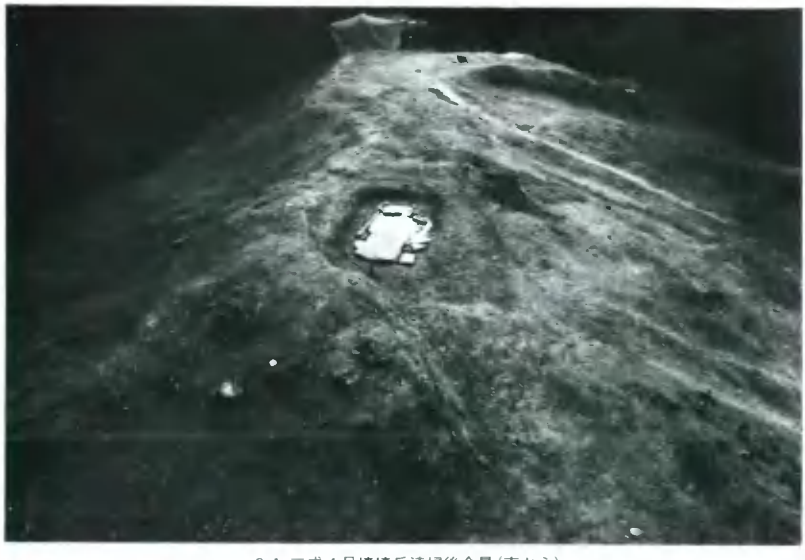
	名　称	所在地	立地	規　模	主体部	出土品	備　考
1	久米三成4号墳	久米町字中北下三成	丘陵上	全　長　35m	箱式石棺計5基	変形獣形鏡1．鉄剣.鉄斧.勾玉.手鎌	
2	楢原寺山古墳	美作町楢原下	丘陵上	全　長　54m 前方長　18m 後方辺　26m	竪穴式石室	変形四獣鏡1．武具．農具．土師器	一部破壊
3	岡　高　塚	勝央町字岡小字高塚	山　頂	全　長　65m 後方部幅　35m	竪穴式石室	鏡．玉．鉄剣．筒形銅器．土師器	石室(長4.8m)板状割石
4	美野高塚	勝央町田井	丘陵上	全　長　36m			間山山塊の北丘陵上にある(旧田井高塚)
5	西宮2号墳	勝央町田井	丘陵上	全　長　50.5m			美野平野に突出する丘陵上
6	植月寺山古墳	勝央町植月北	丘　頂	全　長　85m	竪穴式石室	葺　石　有	周　湟　有
7	下原観音山古墳(下原31号)	鏡野町下原字才の峠	丘陵上	全　長　51m	竪穴式石室	三角縁神獣鏡1他2．柳葉形及び定角形鉄鏃4.剣先1	葺　石　有
8	諏訪神社裏古墳	中央町原田	丘陵上	全　長　51.4m 後方部幅　28m 後方部高さ　3m 前方部幅　12m			

第2表　美作地方前方後方墳一覧表

1-1 三成 4 号墳くびれ部及び後方部調査前(南東から)

1-2 三成 4 号墳墳丘清掃後全景 南東から

図版 2



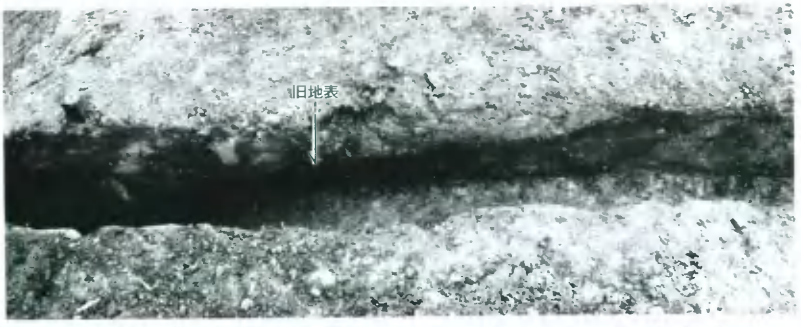
2-1 三成 4 号墳墳丘清掃後全景（東から）

2-2 三成 4 号墳調査後全景（東から）

3-1 三成 4 号墳後方部南側葺石検出状況（東から）

3-2 三成 4 号墳後方部北側葺石検出状況（西から）

図版 4



三成 4 号墳後方部墳丘南側横断面（東から）

5-1 三成 4 号墳後方部墳丘北側横断面 B（北東から）

5-2 三成 4 号墳前方部墳丘東側縦断面 E　北から

図版 6

6-1 三成 4 号墳くびれ部中央葺石検出状況（東から）

6-2 三成 4 号墳くびれ部整形状況（南から）

三成 4 号墳くびれ部墳丘整形状況及び遺物出土状況

図版 8

8-1 三成 4 号墳第 1 主体部人骨出土状態（東から）

8-2 三成 4 号墳第 1 主体部床石検出状況（北から）

9-1 三成 4 号墳第 2 主体部人骨出土状態（西から）

9-2 三成 4 号墳第 2 主体部人骨出土状態（東から）

図版10

人　骨

箱式石棺

三成４号墳第２主体部床面検出状況

11-1 三成4号墳第3主体部検出状況蓋石(南東から)

11-2 三成4号墳第3主体部検出状況蓋石除去(南東から)

図版12

（南西から）

三成４号墳第４主体部検出状況（北西から）

三成4号墳第5主体部検出状況（南東から）

図版14

仿製変形四獸鏡

三成４号墳出土遺物（１）

1

2

三成４号墳出土遺物　2

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（30）

久米三成4号墳

昭和54年3月　印刷
昭和54年3月　発行

編集発行　岡山県教育委員会